

試験科目名  
文化環境論

受験番号

解答紙

（7枚中 1枚目）

問題 I

1)

【出題意図】

具体的に、以下の点に言及することが期待される。

- AI が会話を行う能力に関する説明について、簡潔に要約してください。
- AI を「伴侶」として活用することの主な論点について、簡潔に要約してください。

2)

【出題意図】

回答には、以下のような議論が含まれていることを期待する。

- AI との頻繁なやり取りがもたらす悪影響や結果を明らかにする。

試験科目名  
文化環境論

受験番号

解答紙

（7枚中 2枚目）

-----  
（問題Iの続き）

3)

回答には、以下のような議論が含まれていることを期待する。

- (2)で挙げた問題が生じる理由について、その主張を裏付ける適切な事例、論拠、および／または理論を挙げて説明しなさい。

4)

回答には、以下のような議論が含まれていることを期待する。

- 該当する例、根拠、および／または理論を挙げて、(3)で言及された問題を解決するための主な方法を説明しなさい。

主な方法は明確で、理解しやすいものであること。

試験科目名

文化環境論

受験番号

解答紙

(7枚中 3枚目)

問題II

選択したキーワード〔 工業化 〕

1)

【解答例】

イギリスをはじめとした西洋諸国において18世紀後半から19世紀にかけて生じた家内制手工業やマニュファクチュアから機械制大工業への生産手段の移行のことを指す。デザインにおける工業化とは、製品のひな型を手によって作成し、そのひな形を機械によって大量に複製するような生産様式が支配的になることを意味する。専門家による設計により製品の質は高まり、大量生産によって製品は安価となり、それにより広範な人々の生活を改善するという利点がある。だがその反面、大量生産に伴う環境の破壊、分業による労働の疎外、職人の解体といった負の側面が生じた。

2)

【解答例】

工業化によってデザインする主体が一部の特権的なデザイナーに集約され、職人や労働者、生活者からデザインする能力や創造性が失われるという問題が生じている。人々は生活するにあたってデザイナーや産業が提供するものをただ購入することしかできず、環境への関心を失い、人々と協力して自らの手で自たちの生活環境を構築する力を喪失しがちである。デザインにおいては、工業化を全面的に否定することなく生活する人々がいかにして創造性やオーナーシップを回復するかが課題となっており、そのための参加型デザインやコ・デザイン、セルフ・リノベーション、デザイン・アクティビズムなどのポスト工業化社会におけるデザイン実践が様々に模索されている。

試験科目名

文化環境論

受験番号

解答紙

（7枚中 4枚目）

（問題Ⅱの続き）

選択したキーワード〔 視覚文化とアウラ 〕

1)

【解答例】

「視覚文化」とは写真や映画、テレビなどの映像メディアにくわえて、広告やポスター、マンガなどのデザインのうち、とりわけ視覚に強く関連する文化的事象を指す。美学・芸術学から美術史の領域では、20世紀後半から従来の高級芸術に限らない上記のような対象について従来理論や概念を展開することで、批判的に考察する意義が唱えられるようになった。

こうした視覚文化研究の先駆的な事例となるのが、20世紀前半にドイツの批評家ヴァルター・ベンヤミンによる議論であり、なかでも有名な概念が「アウラ」である。ベンヤミンは19世紀までのブルジョワ文化が礼拝してきた芸術作品やその一度きりの受容形態が、写真や映画などの複製技術によって従来の文脈から離れて複数回にわたり受容されるようになったことを「アウラの凋落」と呼び、複製技術がもたらした歴史的な転回点だと主張したのである。

2)

【解答例】

ベンヤミンのアウラ概念は高級芸術の民主化を指摘するだけのものではない。たとえば彼は、写真に撮影された人々の顔が「礼拝価値の避難所」になると述べるなど、アウラについてどこか両義的な態度を示してもいた。これはつまり、高級な芸術作品が帯びるような特性が複製技術を介して人々に付与されるか、少なくとも身近なものになるということだろう。

このように考えると、視覚文化とアウラの間関係を引き続き現代の文脈に拡張して考えることが可能である。事実、現代の私たちは今までになく頻繁に、カメラを自らに向けて撮影したり、それを装飾したり修整したりしている。こうした「自撮り」はデジタルカメラが可能にした視覚文化であると同時に、単なる承認欲求の発露でしかないのかもしれない。しかしながら、それ以前から人々は人生の節目ごとにわざわざ写真館で撮影してもらったり、自分たちや身近な人間がテレビのうちに登場すると少なからず高揚感を感じていた。その延長線上にあって、現在も人々は自身の姿をオンライン上で積極的に発信し、共有することを楽しんでいる。このようにコミュニケーション手段がデザインされているのであれば、そこでは複製技術が引き起こす偶発的な変化こそが、現代に特有の「アウラ」として作用していると考えられるのではないだろうか。

試験科目名

文化環境論

受験番号

解答紙

（7枚中5枚目）

（問題IIの続き）

選択したキーワード〔 複数形の音楽（musics） 〕

1)

【解答例】

複数形の音楽（musics）とは、ノルウェーの音楽療法家・研究者ブリュンユルフ・スティーゲが提唱した概念である。音楽を単一・普遍的な現象としてではなく、各文化・共同体が固有の実践・価値・意味体系を持つ複数のものとして捉える点に特徴がある。従来の音楽観では西洋芸術音楽が暗黙のうちに標準として特権化されてきたが、スティーゲはこうした多様性を「musics」という複数形で明示することでその前提を批判的に問い直した。

2)

【解答例】

現代的課題としては、実践の場における文化的権力の問題がある。いかなる音楽も中立なものではなく、特定の文化的文脈に埋め込まれた実践である。それゆえ、音楽療法におけるセラピストとクライアントの関係、障害のある人との音楽活動、地域住民と外国人との文化活動など、異なる背景を持つ人々が関わる場では、支援者・企画者の音楽観が一方的に優位に立っていないか、批判的に問い続ける必要がある。

一方で、多様性を尊重する姿勢が行き過ぎると、各文化的実践が相互に理解不可能なものとして固定化・本質化される危険性もある。多様性を認めながらも、文化間の対話を通じて新たな音楽のあり方を模索し続けることが大切だろう。

試験科目名

文化環境論

受験番号

解答紙

（7枚中6枚目）

（問題Ⅱの続き）

選択したキーワード〔 社会性と情動の学習における社会的意識 〕

1)

【出題意図】

回答には、以下のような議論が含まれていることを期待する。

- 社会性と情動の学習の概念において、「社会的認識」とは何かについて、簡潔かつ明確に説明してください。
- 生徒に社会的認識の能力を養うことの重要性について説明してください。

2)

【出題意図】

回答には、以下のような関連する議論が含まれていることを期待する。

- 教育に社会的意識が組み込まれなかった場合に生じうる問題について論じなさい。
- 回答には、主張を裏付ける適切な例や根拠を挙げるようにしなさい。

試験科目名  
文化環境論

受験番号

解答紙

（7枚中 7枚目）

（問題IIの続き）

選択したキーワード〔 企業メセナ 〕

1)

【解答例】

企業メセナとは、企業が芸術文化活動を支援する社会貢献活動のことである。具体的には、美術展や演劇、音楽活動、地域文化事業などへの資金提供や協力が含まれる。単なる宣伝ではなく、企業が社会の一員として文化の発展や市民の創造的な活動を支える役割を担う点に特徴がある。企業イメージの向上や地域との関係づくりにもつながるため、文化政策やアートマネジメントの分野でも重要なテーマとなっている。

2)

【解答例】

現代の企業メセナには、企業の経営環境の変化により文化支援に十分な余裕がない場合が増えているという課題がある。また、支援が大都市や知名度の高い分野に偏りやすく、継続性にも課題がある。一方で、メセナの枠にとどまらず、企業とアートが協働して価値を生み出す新たな関係も模索されている。こうした中で、文化支援のあり方をどのように更新していくかが問われている。